

出口支援としての青春生活応援事業

・『高校内居場所カフェ』について…

西成区で10年前にはじめた「高校内居場所カフェ」っていう事業が、ドーナツトークがもうひとつ柱でやっている事業で10年経って全国で60校くらいまでひろがってきました。

「高校内居場所カフェ」は、高校の中に居場所カフェを作って、比較的しんどい高校生らが中退しないように、まずは「つなぎとめる」という事業です。これは要するにしんどい高校生たちのアウトリーチなんです。

アウトリーチというと、こちらが訪問していくというようなイメージですが、高校生のアウトリーチは、なんとか学校に来ている高校生が、高校の中のちょっと空いている相談室なんかにはぶらっと立ち寄って、（今はコロナで出来ていないですけど）飲食がOKな時期であれば軽くコーヒーとかドーナツとか食べて、そこで奥田みたいなスタッフに相談していくというような事業です。「高校内居場所カフェ」は、10年経って確かに機能しています。

具体的数値は内緒にしていますが、中退者は激減しています。それはそれで成功なんですけど、実は、「高校内居場所カフェ」だけではあと半分足りなくて、高校生と「居場所カフェ」を通じて出会うことはできることになったんですが、肝心要の支援の形がなかなか仕組みとして作りあがってなかったんですよ。

・『ひらの青春生活応援事業』について

この「ひらの青春生活応援事業」の6年間の取り組みで実質行っていることは、105名に対して個別に丁寧にソーシャルワークを行っていることです。

生徒さんによっては、3月31日くらいの高校3年生最後の最後に卒業が決まったり、高校2年生で進級が決まったとかですね。そういうふうなマジカルな支援が生まれていて、まあ偶然なんですけど、丁寧に個別にソーシャルワークを行った結果です。ソーシャルワークは、カウンセリングではないんですよ。

例えば、発達障害の人を支援するという個別支援、1対1の支援というよりは、グループになって、しかもドーナツトークの複数のスタッフだけではなくて、平野区の地域資源、区役所を中心とした社会資源がグループとなって、ある1人の生徒を支えていくというのがソーシャルワークなんですけど、それをひとりひとり105名のパターンでソーシャルワ

クをしていって、その結果として出口戦略っていうか出口支援みたいなものに結びついていくという形やと思うんですね。

・「高校内居場所カフェ」と「ひらの青春生活応援事業」

「居場所カフェ」は、説明するのは簡単なんですけど、もう一方のウイングっていうか、車輪の両輪なんですよね。「高校内居場所カフェ」が自転車の前車輪やとしたら、個別ソーシャルワークの平野区のこの「ひらの青春生活応援事業」は自転車の後輪なんですよ。

このふたつの 2 輪があってはじめて、高校生の支援というのが多分成立すると思っ
ているんですね。

そして、これは、おそらく汎用性がきくんですね、一般化できる事業で、やっとここで、個別ソーシャルワークという形が、実は、「ひらの青春生活応援事業」の真の姿はそこにあるとそれとは別口で、平行で走っているところで。

「高校内居場所カフェ」と「ひらの青春生活応援事業」の二つが両輪となって、一人のしんどい高校生と保護者も含めて、お支えすることができるということがやっとわかってきました。

